

2 『航海と旅行』 *Navigazioni e Viaggi*

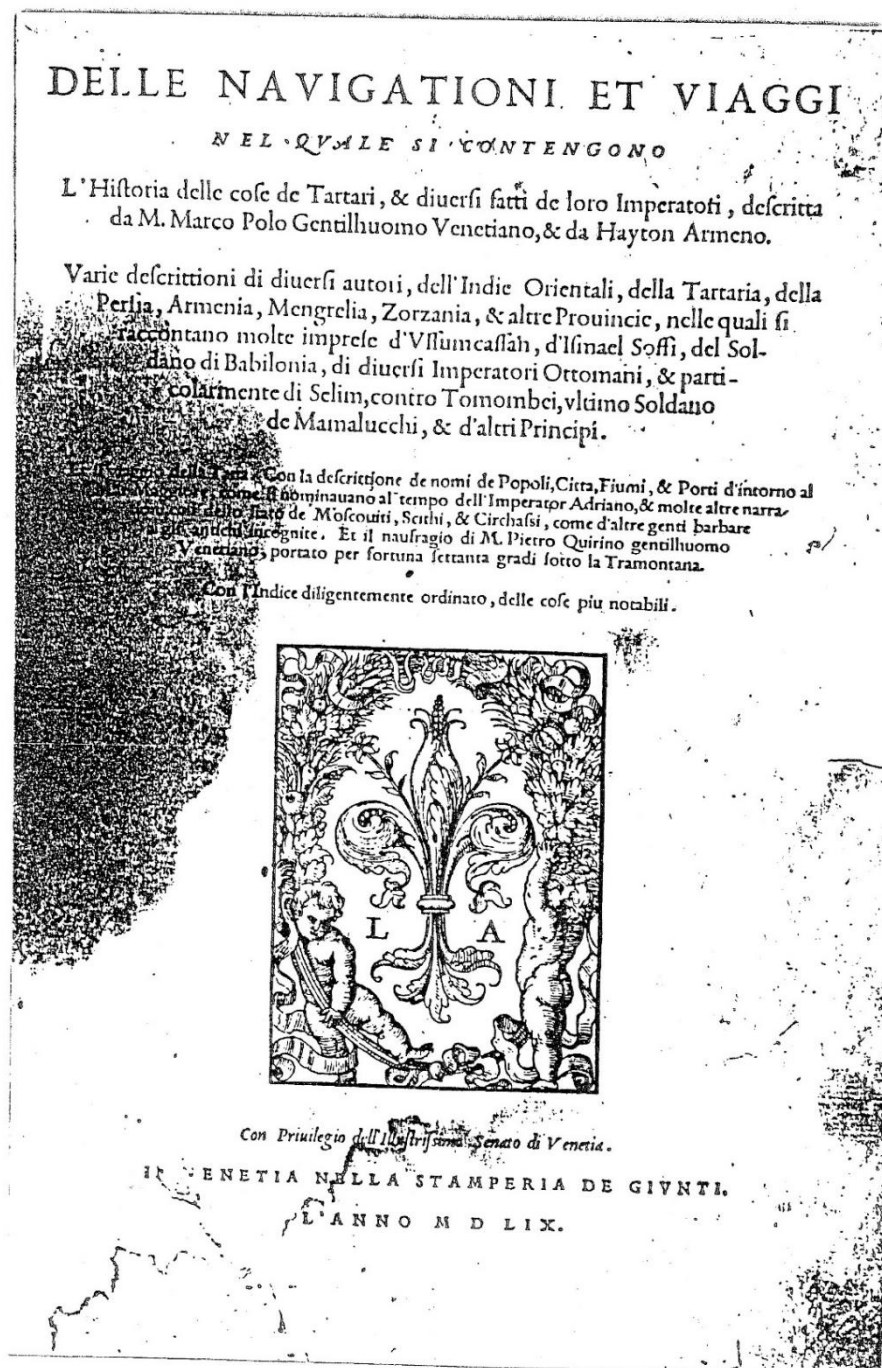


図1 1559年初版第3巻タイトルページ

三巻からなり、初版は第一巻が 1550 年、次いで 1556 年に第二巻、第三巻は 1553 年頃にはすでに原稿は出版社に準備されていた模様だが、なんらかの理由により、おそらくはさらに収録作品を増やすため遅滞し、1557 年のラムージョの死と版元ジュンティ社の火災によりさらに遅れ、ようやく 1559 年初めて編者の名を表に出して出版された(図 1)¹⁾。各巻とも版を重ね、また若干ながら作品の追加が見られる。第四巻も企画されたようだが、実現には至らなかった。

旅行記集としては最初のものではなく、当時新たに発見された国々についての知識は伝統的な教養人のみならず科学者・一般市民、とりわけ一山当てんとする商人や冒険家たちから盛んに求められ、十五世紀後半から十六世紀前半にかけてのブームに乗っていくつかの試みがすでにあった。そのうち少し本格的なものとしては、『諸国』と略称されるヴィチェンツァの人文主義モンタルボッドのものがあつた(1507 年)²⁾、数年にして五版を重ね、ラテン語・ドイツ語・フランス語に訳されて大成功を取めたといわれる。がその中身は、十五世紀後半のポルトガル・スペイン両国の旅行記を縮めて寄せ集め年代順に並べたものにすぎなかった。次が、1532 年バーゼルで出版された、一般にシモン・グリナエウスの手になるとされる通称『新世界』であり³⁾、これまた既存の旅行記をただ集めたただけのものだったが、その序文で、まずは神の栄光を讃え、新天地に赴くのは富の獲得のみならず知識を増やすためであらねばなぬと説いている点や、もう一つ、同時代のもののみならず、マルコ・ポーロやハイトンなど昔のもの、それに旧大陸の旅行記をも収録している点が新しかった。この方式はラムージョにもヒントを与えたと推測され、つまり単なる旅行記の寄せ集めではなく、世界一周によって今や決定的に閉じられ、全体的な展望が可能となった“世界の記述”としての旅行記集という認識である。

そうした理念も含めて事実、『航海記旅行記集成』はあらゆる点で本格的かつ画期的なものとなった。何よりもまずその収録作品の多さと広範さであり、版によって異なるが全三巻で七十編余一千葉近くに及ぶ。時代的には、当然ながら当時の新発見ものに限らず、マルコやハイトンはもちろん、ネアルコスやアツリアノスなどギリシア・ラテンのそれまで未刊だったものをも採録しており、しかも底本とするテキストの選択に当たっては諸写本・諸版本を対校するなど文献学的検討を加え、それをラテン語ではなく俗語イタリア語に訳し、また可能なかぎり全

文を収録した。空間的にも、地球のほぼ全域を万遍なくカバーしており、しかも注日されるのはその分類と構成である。

後に一覧するが、第一巻はレオ・アフリカヌスを巻頭にアルヴァレス、ピガフェッタら主としてアフリカと沿岸部アジアにあてられ、その中にはプレスター・ジョンの国・インド洋・モルッカ諸島・日本や、マジェランやガマの航海なども含まれる。第二巻は、内陸部アジアとヨーロッパ北部・ロシアで、マルコ・ポーロがその巻頭に置かれ、ハイトンがそれに続き、ゼーノやオドリーコが含まれる。第三巻はすべて新大陸で、オヴィエドとコルテスを中心とする。実現しなかった第四巻は、新大陸南部と、ラムージオも南極近くにその存在を信じた未知の大陸にあてられるはずだった。⁴⁾

この配分から分かるとおり、前述『諸国』や『新世界』が時代順であったのに対して、『航海記旅行記集成』は空間別であり、しかも大陸別ではなくいかにも当時のヴェネツィア人らしくいわば海洋別、あるいは発見と征服のルート別、すなわち第一巻はインド洋を取り巻く空間と東廻りルート、第二巻はユーラシア内陸部と地表ルート、第三巻は新大地と西廻りルートとなっている。かくて、同じ日本でもマルコのジバングは第二巻に、発見されたばかりのジアパンは第一巻に置かれることとなった。⁵⁾

ラムージオのコスモグラフィーは、ルネサンス人として新大陸など当時の航海によって次々と明るみに出される新たな発見・現実を取り込む一方、古典の学徒として古くヘロドトスやプトレマイオスに始まるアジア・アフリカ・ヨーロッパというユーラシア大陸の三分割に従い、その知識は利用するというものだった。また、中世教父地理学的地球像はもちろん捨て去るが（ヨーロッパ・キリスト教共同体すら南北に二分されている）、アレクサンデルの鉄門や太陽の樹、それに未知の大陸の存在は信じた。注日されるのはそれよりも、上の配分基準に見られるごとく、地球を物理的空間として静態的に固定するのではなく、その題名に示すとおり航海や旅行、交易や征服などの人間の営みを基準として機能的に分類しようとしている点である。それは、世界が陸と海と島の集まりとしてではなく、人間の主体的行為によって相互に結ばれた一つの総体として捉えられ始めたことを意味する。つまり、ラムージオはこの集成を編むことによって、生まれて七年後のコロンブスのアメリカ大陸到達、1522年のマジェランの世界一周、1549年

ビエル日本到達と、ちょうど自分の生きた時代にその全貌を現しつつあった地球の、いわば最初の地理的世界史を書いたことになるわけである。ちなみに、彼はその編纂の目的を謙虚に次のよう語っている：

ともあれ、私をしてこの仕事に喜んで励ませた理由というのは、アフリカやインドについて記しているプトレマイオスの「地理学」の図が、今日それらの地方について持たれている大なる知識と較べて何とも不完全であるのを見かつ顧みて、世界のそれら地域に赴きまたそれについて詳細に語っている当代の著述家たちの話を集成することは、この世にとって大切であり、またおそらく無駄ではあるまいと考えたからである。これにポルトガル人の海図の記述を加えるならば、そうした知識を好むものにとってはこの上ない満足となる同様な図を作成することが出来るであろう。なんとなれば、少なくともそれら地域すべての海の度・長さ・広さ・また地名・都市それに現在そこに住まう君主たちの名前が分かり、古代の著者が書いているところと比較対照することが出来ようからである。かような仕事が、小生がごとき浅学非才にとって、とりわけかれら著者の用いている言語が種々様々であるがため、どれほど困難なものであったかは、今は口にすまい。言葉でもって己が苦勞と骨折りを誇張するようなことがあってはならぬからである・・・⁶⁾

すなわち、同じ頃パドヴァやボローニアで学んだコペルニクスがプトレマイオスの天文学を転回せしめて新しい宇宙像を提示したと同じように⁷⁾、ラムージオはその地理学を訂正して新しい地球像を最初に描いて見せたといえよう。

かくて地球は、未知の部分はもちろんまだいくらでも残っていたにしても、名実ともに地の球となり、と同時に東も西も中心もなくなるはずであった。ところが、地球はそうなったとしても、世界はそうはならなかった。皮肉なことに、地球が地理的に相対化するにしたがって、世界は歴史的に絶対化するのである。それまでユーラシア大陸の西の端に位置する一地方、極西であったコーロッパは、それら行為の主体者、それを一つに結んだ者として自らをエルサレムに代わる中心として位置付け始める。ラムージオの書も、その題の示すとおりに、あくまで行った者、書いた者の側からの“旅行記・航海記”であって、来られた者、書かれた

者の側の書でも、公正客観的な科学書でもなかった。現地の書を採録することは言語上無理だったし、多くの地域にはそうしたものすらなく、世界はまだこのような形でしか記述される他なかったのである。にもかかわらず、それが直接観察された事実であることをもって、現地の現実として認められ受け容れられてゆく。後に見るが、ラムージョにあっても新しい情報は、たとえ不正確なものであれそれを確認するすべもなく、直接のものであるが故に事実として信じられ用いられていく。かくて、知識の上であるいは武力によって現実に征服したそれら世界の諸地域は、その諸地域の間人々や書物によってではなく、自分たちの側の旅行者・航海者たちとその眼と筆を通じて理解し判断し位置付けられ始めるのである。

それはともかく、この分類・構成法に劣らぬもう一つの大きな特色をなし、同時にその書を今なお価値あらしめているのは、単に数多くの旅行記を収集・出版したばかりではなく、その個々の作品の大部分にそれぞれ長短様々な序文や解説を付したことであった。しかもそれは、ただ地名や位置の特定、遺跡や珍奇な事物の列挙ではなく、それぞれの国や地域の自然・産物・風俗習慣・伝達手段・歴史・通商関係など様々な側面におよび、諸国・諸地域を自然的・地理的空間としてのみならず、そこに住まう人間の歴史的・文化的空間としても把握せんとするものだった。当時の旅行記ものの出版の多くが、通商に役立たすという実目的か、それとも珍奇な事物や習俗の紹介というエキゾチスムを売り物にしたのに対して、ラムージョはそうした流行におもねることなく、本格的な地理的・歴史的出版たることを目指し、国家人のみならず知識人・研究者たちの要請にもよく応えるものとなった。その中には今なお貴重な資料として残っているものもあり、その代表的にして最も優れた例が、マルコ・ポーロの旅行記に前置された三つの「序文」であった。⁸⁾

かくして、この集成は大いに歓迎され大成功を収めた。新しい時代の新しい世界の新しい知識を新たな形で新しい読者に提供するものだったからである。数年後にはさっそく仏訳が現われ⁹⁾、その後もハクルートやパーチャス、ド・ブリらのコレクションのモデルとして使われただけではなく、多くの作品が史料や文献として、あるいはそのまま翻訳されてその中に収録されることとなった。ヨーロッパにあっては十九世紀まで世界のいくつかの部分については基本的文献の一つとして用いられ、今なお唯一の記録としてそれ以前の写本・刊本の発見されてい

ないものも数多い。¹⁰⁾

さて、「序文」に取り掛かる前に、同集成の全容がどのようなものであるか一覧しておくのも無駄ではあるまい。

2. 1 収録作品 ¹¹⁾

第一巻

- 1 ジョヴァン・リオーニ・アフリカーノのアフリカ誌*
- 2 アルヴィーゼ・ダ・カダモストおよびピエトロ・ディ・シントラの航海記
- 3 アンノーネの航海記
- 4 リスボンからサン・トメ島への航海記*
- 5 東インドへのポルトガル人の航海記
- 6 ヴァスコ・ディ・ガマの航海記
- 7 船長ペドロ・アルヴァレスの航海記
- 8 アメリーゴ・ヴェスプッチの航海記二編
- 9 トメ・ロペスの東インド航海記 *
- 10 ジョヴァンニ・ダ・エンポリのインド旅行記 *
- 11 ルドヴィコ・バルテマの旅行記
- 12 イアンボロの航海記
- 13 アンドレーア・コルサーリのインドからの書簡二通
- 14 フランチェスコ・アルヴァレスのエチオピア旅行記
- 15 ナイル川の増水について
- 16 ネアルコの航海記
- 17 ディウへの一ヴェネツィア人水夫長の旅行記
- 18 アッリアーノによる紅海よりインドまでの航海記
- 18 オドアルド・バルボーサの書
- 19 東インド要約
- 20 ニコロ・ディ・コンティの旅行記 ¹²⁾
- 21 イェロニモ・ダ・サント・ステーファノの旅行記
- 22 スペイン人による世界一周旅行記

- 23 マッシミリアーノ・トランシルヴァーノの書簡
- 24 アントーニオ・ピガフェッタの旅行記
- 25 一無名ポルトガル人の手記
- 26 香料交易に関するラムージョの論考
- 27 イゥアン・ガエタンの報告記
- 28 ジアパン島に関する書簡五通 [1574]
- 29 ジョヴァン・デ・バッロスの『アジア』より [1574]

第二卷

- 1 ヴェネツィアの貴人マルコ・ポーロの旅行記
- 2 アイトン・アルメーノのタルタル人の歴史¹³⁾
- 3 ジョヴァン・マリーア・アンジョレツロによるウッスン・カッサーノ氏の生涯と事蹟 *
- 4 一商人のペルシャ旅行記 *
- 5 タナおよびペルシャへのイオサファ・バルバロの旅行記
- 6 ヴェネツィア大使アンブロジーオ・コンタリーニの旅行記
- 7 モスクワに関するアルベルト・カンペンセの書簡
- 8 モスクワに関するパオロ・イオーヴィオの書簡
- 9 モスクワおよびロシアに関するシギスモンド・ディ・ヘルベルスタインの体験記 [1574]
- 10 アッリアーノの大海 [黒海] 周航記
- 11 ジョルジョ・インテリアーノのチャルカッシと呼ばれるジキ人の生活
- 12 ヒポクラテスの空気・水・土地論によるスキタイ人
- 13 ヴェネツィアの貴人ピエロ・クィリーノの旅行記・遭難記 *
- 14 セバスティアアーノ・カポータの航海記 [1583]
- 15 カテリーノ・ゼーノのペルシア旅行記とニコロおよびアントーニオ・ゼーノの北極旅行記 [1574]
- 16 教皇インノチェンツィオ四世により派遣された数人の修道士によるタルタリア旅行記二編 [1574]¹⁴⁾
- 17 オドリーコ修道士の旅行記 [1574]¹⁵⁾

- 18 ヴェローナ人アレッサンドロ・グァニーノのヨーロッパ・サルマツィア記
[1583]
- 19 二つのサルマツィアに関するマッテオ・デイ・ミケオーヴォの書 [1583]

第三卷

- 1 ドン・ピエトロ・マルティーレの西インド史要約
- 2 ゴンザロ・フェルディナンド・ド・オヴィエドの西インドの自然および一般史要約
- 3 ゴンザロ・フェルディナンド・ド・オヴィエドのインドの自然および一般史より
- 4 スォーヴァ・スパーニアに関するフェルナンド・コルテーゼの報告記
- 5 グァテマラに関するピエトロ・グルヴァラドおよびディエゴ・ゴドイの報告記
- 6 一無名スペイン人によるテミスティタン市に関する報告記 *
- 7 カーボ・デイ・ヴァッカことアルヴァロ・ヌネスおよびヌノ・デイ・グスマンの報告記
- 8 フランチェスコ・デイ・ウッロアの発見報告記 *
- 9 フランチェスコ・ヴァスケス・デイ・コロナドの書簡 *
- 10 アントーニョ・デイ・メンドッサによって書かれた書簡 *
- 11 マルコ・デイ・ニツツァ修道士の報告記
- 12 フランチェスコ・ヴァスケス・デイ・コロナドの報告記 *
- 13 船長フェルナンド・アラルコーネのなした航海・発見報告記 *
- 14 ペルーの発見と征服
- 15 一スペイン人船長のペルー征服記
- 16 フランチェスコ・デイ・セレスによるペルーおよびクスコ地方征服
- 17 スォーヴァ・カスティリアで起こったことに関する陛下への報告記 *
- 18 大マラニオン川航行記 *
- 19 西インド大陸に関する論考
- 20 ジョヴァンニ・デイ・ヴェッラツツァーノの報告記
- 21 フランス海に関する一大船長の論考 *

- 22 イアクェス・カルティエの航海記
- 23 チェーザレ・デ・フェドリチ殿の東インド旅行記 [1606]
- 24 オランダ人およびゼーランダ人による北方航海記三編 [1606]

【註 (I-2)】

1) 第一巻 1554, 1563, 1588, 1606, 1613 年、第二巻は 1574, 1583, 1606 年、第三巻は 1565, 1606 年にそれぞれ重版。第一・三巻がラムージョの名の下に出版されなかった理由を出版者トンマーゾ・ジウンティは、何事につけ野心を持たず、皆のためにとばかり心を砕く彼の「際立った謙虚さ」ゆえとしているが、同時に、ラムージョの亡くなった今、その名誉を讃え記念するためにも彼の名で世に出すとも言っているように、元老院や十人委員会の書記という微妙な公職にあったその立場に配慮したためもある（「読者へトンマーゾ・ジウンティ」`Tommaso Giunti ai lettori', Milanese, vol. 3, pp. 3-5）。

ジウンティ社は、1497 年フィリッポ・ジウンティ Filippo Giunti によりフィレンツェに創立され、イタリア国内のみならず、リヨン・ロンドン・マドリッド・リスボン等ヨーロッパ各地に支店を拡げた。『1527 年版デカメロン』の出版で知られる。ヴェネツィア店はルーカ・アントーニオ Luca Antonio (4457-1538) の設立になり、トンマーゾ Tommaso (1494-1566) はその息子。同社はその後程ならずして没落したと言われ、ラムージョの重版が 17 世紀初めで途絶えているのもそれと関係なしとしない。

2) 正式の題名は、フラカンツィオ・ダ・モンタルボッド『新たに発見された諸国とフィレンツェ人アルベリコ・ヴェスプーティオにちなんで命名された新世界』Fracanzio da Montalboddo, *I Paesi nuovamente ritrovati et nuovo mondo da Amerigo Vesputio Fiorentino intitolato*, Vicenza, 1507. 最も早いものとしては、Saint-Bertin のベネディクト会修道士 Jean Le Long de Ypres の東方旅行記集 (1351) が知られる (ポーロを含む)。

3) 実際の編者は、ストラスブルクの聖堂参事会員ヨハン・フッティヒ Johann Huttich。正式の題名は、『古人には未知の地域ならびに島々からなる新世界』*Novus Orbis Regiorum ac Insularum veteribus incognitarum*, Basilea, 1532. 序文は事実、スイスの人文主義者シモン・グリナエウス Simon Grynaeus の手になる。

4) 「もし神の嘉し給うところにより、彼 [ラムージョ] が生き永らえ、南の方、南極下の地域が発見され、隈なく識られるに至ったならば、彼はそれら地域に関する報告記や旅行記を手に入れるべく全力を尽くし、いつの日か第四巻として世に送り出すことができ、かくてプトレ

マイオスもストラボンもプリニウスも、その他地理のことどもに関するいかなる昔の著者たちをも読む必要はなくなったことであろう」（「読者へトンマーズ・ジウンティ」, Milanesi, vol. 1, p. 8）。

5) 「ジヤパン島に関する書簡五通」 'Cinque lettere sull'isola del Giapan, Milanesi, vol. 2, pp. 1003-37. 次の五通を取める。

(1) 「新たに北方に発見されたジヤパンと呼ばれる島についての情報、コーチン、1549年1月1日」 Informazione dell'isola nuovamente scoperta nella parte di settentrione, chiamata Giapan (これが五通全体のタイトルとなっている)。署名はないが、ローマのイエズス会本部宛ニコラ・ランテロットの書簡に含まれる、日本事情を説明したパオロことアンジロウの、1548年11月29日付総長ロヨラ宛ポルトガル語の長い手紙を訳したもの。

(2) 「フランシスコ・ザビエル、コーチン、1549年1月14日」。実際は、ロヨラ宛のその手紙の後半日本に関する部分（ほぼ全訳）に、同年1月20日付コーチン発ロドリゲス宛の書簡の一部（かなり縮約）を付け加えたもの（河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社, 1985, pp. 351-4, 359-60）。

(3) 「フランスシコ・ザビエル、鹿児島, 1549年10月5日、コインブラのイエズス会同僚宛」。鹿児島上陸後最初の著名な書簡（正しくは11月5日、ゴアの会員宛）を三分の一程度に縮めたもの。後に続く者のための心構えを説いた中程の部分を省略し、日本に関する情報の部分のみを取めている（前掲書 pp. 464-96）。

(4) 「フランシスコ・ペレス、マラッカ、1550年11月16日、カーボ・ディ・コモリンの会員宛」。同地にやってきた四人の日本人について報告したごく短いもの。

(5) 「ホアン・グルベラー[ベイラ]、モルッカ、1549年2月5日、ゴアのサン・パオロ院長宛」。モルッカの状況について報告したもので、日本への言及はない。

これらはすべて日本が旅行記に登場する最初のものだが、(1)(2)がラムージョによって初めて出版されたのに対して、(3)(4)(5)は『ポルトガル領インド特報』 *Avvisi Particolari delle Indie di Portogallo*, Valerio Dorico et Luigi Fratelli Bressani, Roma, 1552, にすでに収録されている。(1)(2)(3)は、最初の日本情報として最も貴重なものであり、ラムージョの選択の確かさを物語る。(4)(5)の選択の理由については不明。

なお、冒頭に次のようなラムージョのはしがきがある：

「マラッカからキーナ [中国] 沿岸のさらに向こうとカントン市の上方を航海したポルトガル人商人によって島がいくつかの発見されたが、その一つはジヤパン Giapan と呼ばれ、それに

についてのニュースがいくらか手に入ったがゆえ、本書の巻末に収録するのが妥当と思われる。これらの情報は、とても貴重でこの上なくキリスト教に帰依したポルトガル王が要塞を保有する東インドの様々な地に布教すべく出かけて行ったイエズス会の尊師ポルトガル人神父たちによって書かれたもので、かの島はカタイオと国境を接するマンジ地方の沖合いに位置するとみられ、それについてはリスボン第一の貴人イオアン・デ・バッロス氏がその最初の十巻の最後に書いており、キーナ国とジヤパン島の地図と解説を公にしたいと述べている。それゆえ、寛大なる読者の皆さんには、もしもっと沢山差し上げることが出来たならば喜んでそうしたのだが、どうかそのことを信じて、ここに振る舞うこの僅かな馳走で御満足ありたい。」(p. 1009)

当時一般にそうであったが、絹の北アジアと香料の南アジアという古代からの二分割がまだ受け継がれ、ラムージョにあっても、ジヤパン島がマルコのジパングであることに気付いていないことが注目される。因みに、ガスタルディ作と推される付録地図のうち、第一巻のアジア図 (Milanesi, vol. 1 巻末; Ricci, p. 284 に再録。南を上とする) では、Cympagu としてザイトン沖北緯 25 度に、第二巻の新大陸図 (Milanesi, vol. 6 巻末、北を上とする) では、Giapam としてカリフォルニア沖東経 160 度に小さな島が描かれている。第二巻の地図は火事で失われたと言われ、付されていない。

6) 第一巻序「イエロニモ・フラカストロ閣下へ、ジョヴァンニ・バッティスタ・ラムージョ」 (Milanesi, vol. 1, pp. 4-5)。

7) ニコラウス・コペルニクス Nicolaus Copernicus (1473-1543): イタリア滞在は 1496-1500, 1502-4 年、ポローニア・マントヴァ・フェッラーラの各大学に遊学。主著『天体の回転について』は 1543 年。

8) これら三つの序文は、マルコ・ポーロとその書に関するそれぞれ伝記的・歴史的・地理的解説として三部構成をとっており、ラムージョの旅行記集成の性格を物語る好例となっている。

9) Jean Temporal, *Tome second de l'Afrique, contenant les navigation des capitaines Portugalois, autres faites aux Indes tant Orientales, qu'Occidentales*, 2 vols, Lyons, 1556.

10) ラックは、このラムージョの集成が、「我らがイギリスのリクルートやパーチアスに詰め込まれている大量の無益な中身から自由であり、ラテンのド・ブリのものよりはるかに完全かつ充実しており、つまるところ現存する最も優れた作品である」、とのジョン・ロックの言葉を紹介している (Lach p. 208)。

11) ミラネージ版の目録に拠る (同版では各巻それぞれ二分冊され、計六巻となっている)。

同目録は編者によって便宜的に簡略化されたもので、ラムージョが本文中に用いている正式のタイトルとは異なる(相当長文となるのでここには採らなかった)。また、版によっても異なる(異同はすべて Parks に詳細に跡づけられている)。人名・地名はすべて原文どおりイタリア語読みにした。注を必要とするが、本稿では単に全容を一覧することが目的であり、膨大なものとなるため、ごく一部を除いて付けない。各編とも、Milanesi には詳しい、Parks には簡単だが要を得た歴史的・書誌学的解説がある。末尾 [] 内の数字は、第二版以降に収録された作品の初出年を示す。*印は、パークスによれば今(1955年)なおラムージョ以前の写本・刊本の発見されず、最も古い文献たるもの。

12)* 高田英樹訳「ニコロ・ディ・コンティ旅行記」(一)《大阪国際女子大学紀要》22-2、1996。

13)* [高田³]「VII ハイトン 東方史の華」『原典 中世ヨーロッパ東方記』pp. 459-571。

14)* 同「II カルピニ モンガル人の歴史」pp. 32-99; 「III シモン・ド・サンカンタン タルタル人の歴史」pp. 103-168。

15)* 同「IX オドリクス 東方記」pp. 597-654。